

大平、古民家の旅 2017



2017年9月

旅のチカラ研究所 植木圭二

信州飯田の古民家に泊まってきた。集団移転で人が住まなくなって半世紀の集落なので地図にも載っていない。電話も通じないテレビもない古民家で囲炉裏を囲む昔の生活は、酒が進み、話もはずむ。それにしても囲炉裏の火遊びは格別に面白い。

第一章 恐るべき大平宿

■カーナビにセットできない

2017年9月6日、まだ残暑が残る暑さの中で信州の飯田駅でOさんと合流する。Oさんは地球一周の船旅で知り合った旅と山を愛する男だ。先日マッターホルンから帰って来たばかりで、今回も不便な山奥の旅に付き合ってくれる。

山奥の何もない古民家に泊まる旅なので寝袋や薪を車に積んで、古民家泊の旅が始まる。

飯田から南木曽の方に抜ける飯田峠付近に大平宿（おおだいら しゆく）があるはずなのにカーナビにセットしても出てこない。やはり集団移転して無くなってしまった集落なので地図に載っていない。

ガソリンスタンドのおじさんに聞くと砂払温泉の前の道をひたすら山の方に行けばいいというので、とりあえずその温泉を目指して車を進める。

砂払温泉は市街地のはずれにある。そこから山道をいくのだが、道はすぐに狭い道になる。

車がやっと1台通れるような狭い道が続くが、対向車は来ない。初めて車と遭遇したのは前を行く車で、そしてその車が道を譲ってくれる。道が狭いので安全のために私も相当ゆっくり走っていたつもりだったが、それでも結果としてあおってしまったようだ。

前の車は私たちに伝えたかったのかも知れない。そんなに急いでどうするの？

この先は時間がとてもゆっくり流れているのだよと。

飯田峠の看板を見つける。標高 1235m と書かれている。砂払温泉からここまで 14km、そして峠から少し下ると大平宿に到着する。

ここ大平宿の標高は 1150m、9 月初めのこの時期にしてはかなり涼しい。私の服装は短パンに Tシャツだ。やや場違いな感じがする。



■大平宿とは

どうして大平宿に泊まるのか？

それは京都に住む娘のところに妻が育児支援で行っており、私が車で迎えに行くので神奈川から京都に行くことになった。せっかく行くのだから途中どこかで一泊していこうと思いついて、かねてから気になっていた大平宿に目を付けた。

ここ大平宿は飯田と木曾を結ぶ飯田峠の宿場として江戸中期に開拓された。しかしながら時代の変化とともに過疎化が進み、ついに昭和 45 年(1970 年)に集団移住で人が住まなくなった。

昭和 45 年といえば大阪で万国博覧会が開かれていた。くしくもそのテーマは「人類の進歩と調和」、世の中は新しい時代に向かって進んでいた。それは古いものを残しながらではなく、古いものは捨てて新しくしていくというのが当時の日本の風潮だった。

そういう時代でも「大平宿をのこす会」が発足し、集落を守りながら半世紀ほど経過した。現在の管理は南信州観光公社が引き継いでいる。

古民家は 10 軒ほどで、使いながら残すというコンセプトで昔の生活・文化の継承、教育目的で一般開放されている。

予約は電話で予約状況を確認し、そして申込書を送ってもらう。申込書に記入押印して郵送、許可された場合は利用許可証が送られてくる。あとは一人当たり 2300 円の保存協力費を振り込んで、当日には利用する家の鍵を観光公社で受けとり現地入りすればよい。

この予約の仕組みも極めて古典的だ。それもそうだ、ここは昭和 45 年から時間が止まっている。

当初一人で泊まるつもりでいたが、電話した際に宿泊は二人以上という決まりになっているという。何しろ固定電話も携帯電話もつながらないので何かあった場合を考慮してのことだ。

私は京都在住の O さんの顔が浮かび、早速連絡を取り二人旅となった。便利なことにちょうど大阪・京都から飯田経由で長野に行く高速バスがあり、飯田まで 3~4 時間で来られる。

■ワクワク感いっぱい

大平宿の全体はというと、300m くらいの距離の道沿いに十数軒の家が建っている。家々は適度の間隔で建っており、街並みの真ん中あたりに駐車場がある。

どの家も屋号が付いているのは宿場街らしい。ただ家のつくりはあまり宿場という感じはしない。いや違う、本当は私が江戸時代の宿場の家というのを知らないからだろう。テレビや映画での知識しかないからで、本物は確かに未経験だ。

それに気が付き、本物を体験できることは本当にありがたい。



駐車場に車を置いて今回の宿「からまつや」に入る。

玄関から家に入ると広い土間があり、土間の奥に 20 畳ほどの板の間が広がっている。板の間の土間寄りの部分に囲炉裏が切ってある。その板の間を囲むように畳の部屋が 8 畳、12 畳、3 畳、6 畳とあるが、昔の畳サイズなので大きい。そして家具が何も置いてないので更に広く感じる。

畳の部屋を囲むように廊下があり、廊下の突き当りにトイレがある。トイレはもちろん汲み取り式だ。

土間の端には釜戸（かまど）があり、風呂もある。もちろんどちらも薪で焚く。

釜戸の隣には流しがあり、蛇口もついている。蛇口をひねれば水も出る。山の水ということで多分ろ過や水質管理をしていないので、パンフレットには飲料水を持参するようにと書いてある。山男の〇さん曰く「山の水ならば安全なのに、どうして」と不思議な顔をしている。

電気は来ているが、電灯のみで冷蔵庫もテレビもない。電灯は傘のところにスイッチがある昔懐かしいタイプだ。さすがに昭和 45 年だ。

江戸時代にタイムスリップした家の中を探検しながら、この家にどんな人が住んでいたのだろうか、どんな生活をしていたのだろうか、当時を思いワクワクしている自分に気が付く。



第二章 長い夜

■火遊びのすすめ

まだ明るいが、囲炉裏に火をおこし始める。薪は結構たくさん持ってきたので余裕がある。とにかく焚火は楽しい。

私は厳冬の猪苗代湖に毎年極寒キャンプに行っているが、焚火をするために行っていると言っても過言ではない。夏のキャンプでも焚火をするが、寒い冬の方が火の有難味が身にしみて分かる。寒いのでどうしても火に近づき、そして火に見入ってしまう。

そう焚火は暖をとる以外に見ているだけでも楽しい。

何が楽しいのか。

木が燃えはじめて、段々火力が強まって、ピークを迎えて、そして最後は燃え尽きていく。木と木の関係で強く燃える木もあれば、ずっとくすぶり続ける木もある。人の一生のような気もする。他にもいろんな側面があるが文章ではとても表現しきれない。体験しないとわからない。

確か、俳優の渡哲也の趣味は焚火だった。

火は人間を変える、いや火が人間を変えた。人間と動物の決定的な違いは火を使えるか否かだと聞いたことがある。原始時代はきっとそうだった。

ところが最近の子供や若者の中には火をおこすことや火を上手く使えない者も多いという。ゲームなどに没頭しているからだろうか。

ゲームは人間の特権ではなく動物でもできる。チンパンジーがゲームをやっていた映像を見た

こともある。

逆説的な言い方をすると、生き物として人間が人間として確立するには火が必要ということになる。

ここに、大平宿を存続させて教育目的に利用するという価値があるのかもしれない。子供たちが囲炉裏の火を囲んで、一晩を過ごすという素晴らしい体験ができることは本当にありがたい。

福沢諭吉の学問のすすめは「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず。されど人の世は賢き人あり、おろかな人あり、貧しき人あり、富めるもあり。人は生まれながらにして貴賤貧富の別なし。ただ学問を勤めて物事をよく知る者は貴人となり富人となり、無学なる者は貧乏となり下人となるなり。」

要するに、人間はもともと平等なのに差が生じるのは学問をするかしないかだと言っている。

ここで私は「火遊びのすすめ」だ。生き物はもともと平等なのに差が生じるのは火を使えるかどうかだ。火を使えること、コントロールできるかが人間の証明だ。

人間がコントロールできていない火があるとすれば、それは原子力の火かもしれない。コントロールできなければ、その火の前では虫も動物も人間も同じレベルでしかないということになる。

それは福島第一原発、そして核爆弾・・・か。



■ 囲炉裏で乾杯

出発前に夕食メニューを色々悩んだ末に、おでんに落ち着いた。ダラダラと飲みながら食べるのには最適で、鍋を温めながら具を放り込んでおけばいいので調理らしい調理をしなくて済む。そして旨い。酒のつまみにもなる。

囲炉裏の上には鍋を吊るし高さ調整もできる自在鉤（じざいかぎ）が付いている。そこでおでんの鍋をかけて温める。そしてまずはビールで乾杯だ。

まだまだ外は明るい、他にやることもない。本来ならば風呂を沸かすとか、ご飯を炊くとかがこの時間のはずだが、私もそしてOさんも飲むのは嫌いな方ではない。

そして囲炉裏がそれを許してくれる。おっと、何て勝手な解釈をしているのか。

自在鉤にかかっている鍋をやかんに替えてお湯を沸かして焼酎のお湯割りタイムに入るのだが、そこから先はもうここに書くまでもない。

囲炉裏といえども、かなりの薪をつぎ込んでいるので結構熱い。玄関の戸を開けて飲んでいるが、それでも暑いのと煙いのでOさんが反対側の戸まで開放する。すると心地よい秋の高原の風が入り、家の中は快適な空間となる。

外はもう暗い。網戸もないので当然のことなのだが、裸電球や囲炉裏の明かりを求めて蛾や虫が家の中に飛び込んでくる。飛んで火にいる夏、いや秋の虫ということなのだが、囲炉裏の火には飛び込まなくても、裸電球に寄って来る。そしてさすがに少しうっとうしい。

どうしたものかとそのまましておくと自然にいなくなってしまう。何匹も何匹もそんな光景を見るが、虫たちは皆寄って来ては間もなくいなくなる。

理由はもちろん煙のためだろう。蚊取り線香のごとく、虫は煙が大嫌いなのだ。煙には殺菌作用もある。だから燻製という保存食ができた。

サッシも網戸もない昔は、今とは家の概念が異なる。火を焚くので密閉性がなく隙間風も虫も入るが、囲炉裏の火が家を守ってくれて殺菌もしてくれる。昔の人々の知恵が詰まっている。

古民家の夜はそんなことを考えながら過ぎていく。そして囲炉裏を囲んでの酒宴は、いつにもまして盛り上がる。

■満月がまぶしい

今夜はほぼ満月だ。そしてまぶしい。街路灯や建物の窓明かりもないので、ここは月の明かりだけが頼りの昔と同じだ。月はこんなにも明るくて、輝いているものだと実感する。



それもそのはずで昨日は旧暦のお盆だった。お盆とは、生命の誕生や死後の世界と月の満ち欠けとを密接に関係づけた満月信仰だと聞いたことがある。満月に生命の源があるという思想だ。

現在の太陽暦でも便宜上お盆は7月15日か8月15日にしているが、新暦ではどちらも満月とは関係しない。必ず満月になる旧暦のお盆とは全く意味が違う。

旧暦は月の満ちかけを基準にしているので1日は必ず新月、3日は三日月、7日は半月、15日は満月になる。だからお正月の元旦には月が出ないし、7月15日のお盆は満月になる。

月の満ち欠けの周期は約29.53日で12倍すると1年は約354日で、新暦つまり現在の太陽暦は約365日なので10日超のズレが生じる。だから3年に一度くらい閏月を挿入して年13カ月にすることで調整していた。

また正月を新春と呼ぶように、旧暦では1～3月を春、4月～6月を夏、7月～9月を秋、10月～12月を冬としていた。そして1年で最も昼間が長い夏至は5月、短い冬至は11月、その間にあたる春分の日は2月、秋分の日は8月に含むように決めていた。

だから旧暦と新暦とでは季節感においてかなりずれている。例えば7月は旧暦では初秋で、秋が始まる月になる。ところが新暦の7月は夏で、むしろ7月前半は梅雨明けもしていないので夏の始まりの月のような感じだ。

本日は新暦9月6日だが、旧暦では7月16日で、もう秋だ。そして一か月後の8月15日は秋のど真ん中の中秋だ。中秋の名月は十五夜と呼ばれている。月は季節を強く感じさせてくれる。

夜も更けた静寂の中、まぶしい満月が大平宿を明るく照らしている。

私はいろいろな想いをめぐらす。ここに住んでいた人々の生活、夜は何をしていたのだろうか。そして生死についても考える。亡くなった私の父母、新しく生命をもらった孫のことと尽きない。

それもこれも満月のチカラか。

第三章 山の朝

■すがすがしい朝

山や高原に泊まるといつも感じるのだが朝はすがすがしい。独特の空気感があるからだ。そして今朝はいつにも増してとてもすがすがしく感じる。時計がないので時間も気にしなく、体が目覚めたいという欲求だけで目が覚めたせいかも知れない。それだけならばキャンプの朝と同じなのだが、何かキャンプとは違う。

それは家の中にいるということだろう。家といっても密閉度が低いので外気を感じられる。そして朝の陽の光が家の中に差し込む光景が何とも言えない風情を感じさせてくれる。昨夜の囲炉裏の匂いが少し残っているのも嬉しい。五感から江戸時代の朝が味わえる。

■管理人

斜向かいの家に誰か泊まっている。他の家の間取りも見たくなかったので、家の中を見せてもらおうと声をかける。するとなんと、管理人だという。そういえば家の中は半分住み着いているような生活感がある。

「旅のチカラ研究所」の名刺を出して名刺交換をすると「大平現地状況管理者」と書かれている名刺をもらう。

管理人はいないと聞いていたが、常駐しないで時々やって来て数泊して、施設のメンテナンス、草刈りなどをしているという。管理人といってもボランティアで、好きでないとやっていけない仕事だ。良い機会なので大平宿や利用者について現場の生の声を聞く。

するとやはり囲炉裏や釜戸が初体験で、火をうまく使えない子供や若者が多いという。また虫が全く苦手という人が多くなっているという。改めて思う「人類の進歩と調和」は何処へいった。

管理しているのは9軒で、「大平宿をのこす会」の主旨に賛同した人が家を提供したということで、その他は個人で個別に管理しているという。

そして私の名刺も結構役立つのだと感心する。

■宿場探検

ラッキーなことに、管理人に頼んだら各家の中を見せてくれることになった。案内してもらい各家の鍵を開けて見せてもらう。



焼失したので建て替えた家も2軒あるという。「下紙屋」と「深見荘」だ。この2軒が比較的新しく、五右衛門風呂があったり水洗トイレがあったりする。しかしながら建て替えたのはきっと集団移住の前なので50年以上は経っているだろう。

どの家も基本的な造りは「からまつや」と同じようだ。

お勧めの家を聞いたら、集落の一番はずれにある「八丁屋」だという答えが返ってきた。見せてもらったが、私にはその差が分からなかった。どこも同じようで、そしてどこも面白そうだ。

ただ、五右衛門風呂はあまり入る機会がないので面白いかもしれない。その場合は「下紙屋」だ。駐車場から近いのならば、「からまつや」が使い勝手が良い。

「丸三荘」という民宿を見つける。残念ながら留守のようで中を見せてもらうことはできなかったが、洗濯物が干してあったので一時的に家を空けていたようで営業はしているようだ。

後で調べたら、素泊まり3000円、二食付き6000円、囲炉裏も風呂も体験できるという。

設備は多少現代的なアレンジをしているかも知れない。目的が異なるので今回私たちが泊まった家とは趣が違うと思うが、お金を払って寝床と食事の提供を受けるという宿場本来の意味ではこれも良いかもしれない。

集落の中心部分には学校がある。教室が3つほどあり、おそらく小学校・中学校が一つの学校で複数学年での混合授業の風景を想像してしまう。校舎入口には宿泊訓練棟と書かれた看板がかかっている。

校舎の裏手は大きな BBQ 場がある。教室には囲炉裏や釜戸が無いので、利用者の食事のために新しく作ったようだ。100人分くらいの食事や宿泊ができるので中学生や高校生の林間学校などに使える。



■仕上げ

帰りに砂払温泉に立ち寄る。昔の旅人が草鞋（わらじ）の砂を払って入湯したということから砂払温泉となったという。無色透明アルカリ性単純泉で湧出温度 39℃ということなので現在は加温しているが、昔はきっと 39℃のままで入浴したのだろう。

早速入浴して燻製状態になった体や髪を洗い流すことができた。やはりキャンプ、いや囲炉裏の後の温泉は最高だ。

最後に南信州観光公社に立ち寄り、鍵を返す。観光公社は道の駅「りんごの里」と同じ建物にあるので土産を買って帰る。

江戸時代へのタイムスリップ旅行は終わった。ちょうど丸一日、感動の 24 時間だった。